

# 令和6年度 第1回神戸市総合教育会議

と き 令和6年4月24日(水)

10:30~12:00

ところ 神戸市役所1号館14階 大会議室

## 1. 開 会

○企画調整局大学・教育連携推進課

それでは、ただいまより、令和6年度第1回神戸市総合教育会議を開会させていただきます。以降の進行は、市長、よろしくお願いいたします。

○久元市長

おはようございます。よろしくお願いいたします。今日は、福本教育長が就任されて、初めての総合教育会議ということで、事前には体力の向上ということがテーマになっていて、それを御論議いただければと思いますが、新年度の総合教育会議、どういう会議の運営方針をするのかとか、どのような議論をするのかということも、併せて議論できればと思いますので、よろしくお願いいたします。

○企画調整局大学・教育連携推進課

それでは体力向上に向けた取組について説明をお願いします。

## 2. 議 題

### (1) こどもの体力向上

○教育委員会事務局学校教育部部長（教科指導担当）

それでは、教育委員会事務局より児童・生徒の体力向上に向けた取組につきまして御説明いたします。

まず、令和5年度の全国体力・運動能力、運動習慣等の調査についてです。前回の総合教育会議におきましては、令和4年度までの結果をお示ししておりましたので、令和5年度の結果を簡単にお伝えさせていただきます。

調査の概要です。実施時期は4月から7月にかけて、実施学年は小学校5年生と中学校2年生の男女となっております。

調査内容につきましては、御覧いただいております8種目で行っております。

小学校5年生、中学校2年生における体力の合計点です。上が神戸市平均、下が全国平均となっております。

小学校5年生男子は、全国平均を上回っており、また、小学校5年生女子と中学校2年生男女におきましては、全国平均を下回る結果となっております。

次に、児童・生徒質問紙から分かる運動意欲についてです。運動やスポーツをすることが「好き」、あるいは「やや好き」と、肯定的な回答をした割合につきましては、例年どおり高い水準を保っております。

このような現状を踏まえまして、体力向上に向けては、次の3つの視点を踏まえた取組を進めているところでございます。

1つ目、運動内容の改善としまして、学習の目標を明確にし、振り返りの時間を確保することや、運動やスポーツの楽しさを実感できることなどの授業改善に取り組んでおります。

2つ目は、運動意欲の喚起としまして、学習用パソコンを活用した取組や、思わず運動したくなる環境づくり、民間事業者との連携により、主体的に運動やスポーツに親しむことができる支援に取り組めます。

3つ目が、運動機会の拡充といたしまして、授業に限らず、休憩時間や放課後などの学校生活を通して運動機会を確保してまいります。

まず、運動内容の改善についてです。主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善としまして、児童・生徒が個々の特性、状況に応じた目標設定をし、授業を通じて「運動やスポーツが好き」、あるいは「体育の授業が好き」といった、運動意欲の喚起につながる授業改善を進めています。

推進校での取組などを、研修や講習会を通じて各校へ発信しております。具体的には、児童・生徒が授業で自分なりの目標を持つことができるように、目標を設定する場を設けたり、目標を明確化したりすることで、学習全体の見通しを持たせておりま

す。

自分なりの目標や課題に向けて練習に取り組むときに、友達との話し合い活動の場を設けることで、課題解決に向けた自分の考えをより深めることができます。

後のICTを活用した授業改善のところでは、実際の話し合い活動を御覧いただきますが、ICTを有効的に活用することで、話し合い活動の活性化につなげることができます。

児童・生徒が学習したことを授業の最後に振り返ることで、次の授業の目標を持つことができ、またやってみようという運動意欲の喚起につなげることができます。

次に、ICTを活用した授業改善です。児童・生徒は自分や友達の動きを撮影し、お手本動画と比較しながら課題を発見していきます。課題を明確化することで、運動が苦手な児童・生徒も含めて、より主体的に学習に取り組むことができます。実際に1人1台の学習用パソコンを活用して、話し合い活動を行っている様子を御覧ください。

運動意欲の喚起に向けた取組です。1つ目は、体力調査の結果の可視化です。児童が体力テスト結果の記録を学習用パソコンに入力すると、結果がレーダーチャートで表示され、自分の得手・不得手が可視化されます。自分の体力に関心を持つことで、主体的に運動に取り組むきっかけになります。こちらは体力調査の結果が可視化され、自分の体力実態や課題が把握できる画面です。

次に、コベルコ神戸スティーラーズとの連携事業です。ラグビー選手が体力向上につながる運動遊びを紹介してくれる動画を作成しています。動画を見て、遊びを楽しみながら運動意欲が向上し、自然と体力向上につながる取組になっています。

次に、運動機会の拡充に向けた取組です。

1つ目は、放課後運動遊び推進事業です。大学生の協力により、放課後の運動場を開放する取組で、児童の運動遊びの機会をつくっています。

写真は大学生による運動遊びサポーターと、一緒に児童が鬼ごっこやボールを使っ

た遊びなどを行っている様子で、運動遊びサポーターがいる曜日は、運動場で遊んで帰る児童の数が増える傾向にあります。

次に、民間事業者による放課後スポーツ教室です。放課後にスポーツ専門指導員による運動教室を開催し、放課後の運動機会の拡充を図っています。この教室に参加したことから、さらに主体的に運動に取り組むことを狙っています。

次に、学校現場で行われている具体的な取組です。

1つ目は、行事等の活動です。中学校では、生徒会を中心に体育会の種目を計画・立案・実施することで、主体的に楽しんで、運動に取り組んでいる姿が多く見られました。

次に、運動意欲を喚起する環境づくりです。青一色だった投てき板に、的を描くことで、思わず投げたくなる場をつくったり、握力計をいつでも触れるところに置いたりすることで、思わずやってみたくなる環境をつくっています。運動意欲が喚起され、自然と体を動かす児童・生徒の姿が見られました。

最後に、休み時間等における児童・生徒主体の活動です。小学校では、高学年児童が運動企画を考えて実施することで、楽しんで運動に参加しています。

以上、体力向上に向けて、内容改善、意欲喚起、機会拡充の3つの視点を踏まえた取組について御説明をさせていただきました。

運動を習慣化させるためには、児童・生徒が体育の授業だけではなく、休憩時間や放課後に体を動かし、さらに家庭生活や地域活動の中でも意欲的に運動やスポーツができる環境づくりが課題になります。

教育委員会事務局としましては、体育・保健体育課の目標である、全ての子供が生涯にわたって心身の健康を保持・増進し、豊かなスポーツライフを実現することを目指し、今後も引き続き、運動に苦手意識のある児童・生徒に対して、「運動やスポーツが好き」ということや、「体育の授業が好き」という運動意欲を喚起し、放課後や休日にスポーツや運動に取り組む児童・生徒の増加につながる授業改善や環境づくり

に取り組んでまいりたいと思っています。

体力向上の取組についての説明は、以上となります。

○久元市長

ありがとうございました。そうしたら、今日は、前回の議論に重なるところがあるかもしれませんが、子供たちの体力の現状を、どういうふうに捉えればいいのか、一般的にですよ。神戸の場合に、全国的に劣っているというふうに考えられるのかどうかですよ、まずその辺のところ、要するに今の子供たちの体力は、全体的には低下傾向にあるというふうにされていて、その要因としてどのようなことが考えられるのかと。

それから神戸の子供たちの体力の状況、全国比較ということがどこまで意味があるのかということも含めてですね。その辺のところを、大変恐縮ですが、この辺は御専門の山下委員から口火を切っていただければ、大変ありがたいですけれども。

○山下委員

それでは失礼します。御指名ですので、少し簡単に申し述べさせていただきます。

市長より御指摘があったように、前回の話にも少し関わりますけれども、私も詳細にちょっとデータを持ち合わせていなくて、また分析もできていないのですが、全国的に見てそれほど劣っていない部分もあるのかなと。むしろ都市部でありながら、割合の高い水準のお子さんもおいでになって、それほど劣ってないのかなとは思っています。

ただ、どうやらやはり二極分化なり、幾つか得意なできる子の層と、他方の極には苦手で、体をほとんど動かさないというような、2つの極に分かれているところがあるのかなという気もしています。

農村部とかそういうふうなところだからといって、よく遊んでいるかということ、むしろそういったところは、少し危険なので外遊びをさせたくないという親御さんがいらっしゃると思います。逆に街中のように、比較的に子供が遊ぶ場所が見つけられるよ

うなところでは活発に遊んでいて、それなりに体力もついているのかなという印象があります。現状を把握するという点では、そういったことを今気づいております。

○久元市長

ありがとうございました。ほかはいかがでしょうか。

まず子供たちの体力は、全国比較の以前に、諸外国がよく分かりませんが我が国においては、児童・生徒の体力ってやっぱり低下をしてきているのでしょうかね。その要因というのは何なのかっていうことは、いかがでしょうか。もし山下委員、続けて何かお話がありましたら、その辺のところを。

○山下委員

それでは、失礼いたします。昔と比べてという意味では、もう確実にやはり全体としては、低下しているかなという気はします。

それこそ、昔は地域の中で、縦割りで子供たちが遊ぶ傾向にあって、その中で例えば野球に似た遊びとか野球とか、そういったことを上の世代の子がやっているのを楽しそうだから下の子がついて入ると、その中で最初はちょっと慣れていないのですが、だんだんと周りに教えてもらってできるようになると。ですから、小学校に入るときには、もう大体みんなボール投げぐらいはできる子がかなり多くて、学校側もそれを前提としていましたので、例えば小学校でも中学校でも、子供たちは基本的な動作を練習するより、試合やゲームを楽しむことを希望したため、野球なりサッカーはすぐにはできるという状況でした。

もうかれこれ20年くらい前からになりますが、すでにボール投げができないということがあります。ボールを投げると、二、三メートル先の地面に突き刺さるようなありさまで、それで学校側としてはソフトボールをやろうとしてもゲームにならないため、投げ方から教えるということで、校舎の3階、4階からトラロープを渡して、そこにバトンリレーで使うバトンを通しました。今はリングも多くなっているのですが筒状のほうを通して、この角度で投げたらいいんだよ、ということを練習するよう

な、そういう実践が20年ぐらい前から現場では行われるようになってきていました。

そういった意味では、基礎的な走る、跳ぶ、物にぶら下がる、登るといったようなところでは、筋力の低下も含めて、大分しんどい状況にあるのではないかなと思います。

○久元市長

ありがとうございます。先ほど事務局から説明があった内容についての議論は、この後行うにして。まずその辺の基本的な視点ですよね、今の山下委員の御指摘も踏まえながら、いかがでしょうか。

○本田委員

子供の体力をどう考えるかということで、先ほどの山下委員の御説明のとおり、全体的に落ちているのかなということは想像できるのですが、それは子供だけなのでしょうか。大人も含めて現代の日本人といいますか、神戸の人だけでなく、やはり運動の機会が減っていたりとか、そもそも歩いたりしないで、何でも電車を使うとかといったところから、子供だけに焦点を当てるのではなく、全体的に低下している中でというところの議論は大事なんじゃないかなというふうに思っています。

○久元市長

なるほど。そうすると、やはり子供だけに焦点を当てるのではなくて、市民全体の体力づくり、あるいは健康づくりというそういう視点を持ちながら、児童・生徒の体力というのを考えるべきだということですね。

○本田委員

といいますのは、子供は学校でも生活していますけれど、ほとんどほかの時間で生活していますので、やはり家族を含めみんなの考え方や意識を向上させるということが必要かなと思っています。

○久元市長

大人も含めて、なぜ体力低下したのか。歩かずに電車に乗るというお話がありまし



たけれど、神戸はもう昔から非常に便利なまちですね。昔のほうが便利だったかもしれませんよ、市電があったときは。すぐ市電に乗りましたからね。今はバスの本数を減っているということもあって、電車とかバスに乗るから体力が低下したということではないのでしょうか。それも要因かもしれませんが、どうして全体的に体力が落ちてきたのかということの考察は、いかがでしょうか。

○本田委員

先ほどのことに付け加えますと、やはりライフスタイル、生活スタイルというのが大きいのかなと思います。例えば子供たちは、自身のスケジュールが結構忙しいです。塾などから帰ってきて、もしかしたらスマートフォンとか、ゲームというようなライフスタイルもあるかもしれませんが、大人も同じなのかなと思っています。ですので、ただ単に通勤とか通学とかというところだけではなく、同じような時間を体を動かすことに使っているかどうかということもあるかもしれません。

○久元市長

ほか、今の御指摘以外の視点も含めて、いかがでしょうか。どうぞ。

○正司委員

歩く量を増やすことが、人々の健康のためにプラスになるのではないかという議論は、国土交通省や厚生労働省でも行われていて、そのような指針が出ているのは、私も知っています。

確かに、昔は歩かざるを得なかった。どこかへ行って何かしようと思ったら、歩かざるを得なかったのが、今は、特に自家用車があれば、家族で動いて、ショッピングセンターの中で、そんなに歩かずに買い物して帰ってというような形になって、それ自体はおかげで便利になった面もあると思うのですが、そこで失ったものの中に、歩く量が減っているということがあるのだと思います。

さりとて、だから強制的に歩かせるというのは、どこか間違っていると思うので、楽しく歩けるというか、歩いていろんなことができる環境がどれだけあるのかのほう

が大切というふうに感じています。

特に子供たちだったら、昔の子供たちの数から比べると、半分とか3分の1ぐらいになっているので、子供たちの徒歩圏内で一緒に遊ぶ仲間というのは、本当に減ってしまっている状況があります。その中でどういう形で、子供たちが楽しく体を動かすのかという環境をつくるのが大切かなと思います。そういう意味では、子供たちだけで楽しく遊ぶ環境をつくるということは、なかなか難しいような気もしています。

どうしても、この体力テストでは点数で出てくるので、子供たちに焦点が当たるわけですけれども、この合計点が本当のいわゆる体力、心身の健康の体力のどの面を、どの程度測っているのかということも、少し考えながら議論したほうがいいのかなどは思っています。

○久元市長

確かにそうですよね。ほかにもデータがいっぱいあるのかもしれませんが、このデータだけで、なかなか判断しづらいですよね。そのほかは、いかがでしょう。

あと、正司委員は交通政策の専門家でもいらっしゃるわけですが、そういう公共交通網と、それから歩くということとのバランスっていうことを考えるときに、経年的に見て、神戸に限らず、この都市部における、その辺の車を使う、あるいは公共交通を使うということと、歩くということのバランスみたいなものをどう考えたらいいかですね。

ちょっと総合教育会議の話題から少し外れるかもしれませんが、神戸では三宮ウォーターフロント、都市全体の活性化を進めていて、そこのキーワードに回遊性を高めることがあります。三宮、今は6つの駅があるわけですが、これをあたかも1つの駅と考えるてもらい、利便性と快適性と魅力・デザインの向上を図って、駅から降りたらできるだけ歩いてもらい、できればフラワーロードを歩いて、ウォーターフロントのほうに行ってもらい、ウォーターフロントを東西に歩いてもらい、センター街を歩いて、大丸前を歩いて、居留地を歩いて、ウォーターフロントに行ってもらったり、

元町商店街を歩いてハーバーランドのほうに行ってもらおう。できるだけ歩いてもらうということが、大きな眼目ではあるわけです。

以前は、三宮からフラワーロードを南下すると、人の流れが大体国際会館ぐらいのところで止まっていたので、まず東遊園地をリニューアルして魅力的にする。それから、市役所の2号館を複合化して、人がたくさん訪れるようなホテルや商業施設も入れて、オフィスもつくる。それからブリッジをかけて、ウォーターフロントに行ってもらおう。

そして1万人規模のアリーナができる。1万人規模のアリーナができたときに、アクセスが悪いのではないかという記事が時々あるわけですけど。しかし、アリーナのこの運営主体の方は、1万人集まったときに、運ぶのはもう無理ですと、むしろ歩いてくださいということも仰っているわけです。そういうような考え方がまちの整備にはあります。その一方で、やはりアクセスをちゃんと整備してほしいという要請もあって、そこは一定対応しないとイケない。今はポートループが走ってるわけですけど、これも本数が少なく、まだ乗ってくれる人が少ないんですね。しかしウォーターフロントにずっといろんな施設が張り付いていくと、いずれはLRT路面電車を敷設するというのも考えて、公共交通と歩いてまちを楽しむということのバランスをどう取るのかっていうことを、1つの眼目にしているわけです。

ちょっと正司委員の話から触発されまして、少しPRも含めてお話をさせていただきました。しかし、アクセスをちゃんとしなさいってという要請は、要するに歩くな、歩かんでもいいってことですよね。これは都心だけに限らず、まちづくりを考えるときに、当てはまるわけです。こんなところをどう考えたらいいのか、もし正司委員からお話がありましたら。

#### ○正司委員

交通政策の議論の場ではないので、体力を意識しながらしゃべり出しますけれども、アクセスをよくするという議論、もちろん様々なニーズがあり、様々な基礎体力の方

に様々な形でアクセスを良くしてほしいという要望があるかと思います。その方々も歩かなくていい環境をつくってほしいと言っているわけではないというふうに理解した方がよいのではないのでしょうか。例えば、三宮からウォーターフロントって2キロぐらいあるので、確かに一遍に歩こうとすると、元気な人以外はなかなか大変。

したがって、ウォーターフロントに行きたい人のためにアクセスをよくという要求がでてくるけれども、それを往復のピストンで、ウォーターフロントの1か所を訪れて帰るようにすることが、本当のまちの魅力とか、ウォーターフロントの魅力があるということとは言えないのではないのでしょうか。たまたま特定の施設がそこにあったから行っているわけで、それではまちの魅力向上につながらないのではないかと思います。

分かりやすい例でいうと、郊外型ショッピングセンターと三宮、元町というのがあるって、どちらでも買物ができるわけです。ただ郊外型ショッピングセンターというのは、ある意味、全国どこも同じような形で、神戸の魅力というものは、やはりどれだけ独自性があるって、様々な選択肢が都心で提供できているかということではないのでしょうか。

ということは、アクセスをよくするという話は、そのようなエリアで、市長もおっしゃった回遊性をどう高めるのか。歩けない人はどこでどう休んで、休むことでお金を使ってくださいという環境もできるわけで、そういうことかなと思うのですね。

そこで様々な人の出会いが増えて、わいわいできる環境があるということは、コミュニティがしっかりしたまちになるのではないかと思います。ちょっと話は飛躍するかもしれませんが、子供たちの遊ぶ環境とか、居場所をつくるという話も、やはりそういうコミュニティとか、雰囲気がいる。車で護送されて、何か特定の施設で遊ばせて、帰るといった形の環境から脱却を図ることが大切かなというふうに、感じています。

○久元市長

要するに、やはり人と人とのつながり、世代間を超えた人と人とのつながりという

のは、体力と関係があるということですか。

○正司委員

それは心身の健康と、大いに関係があると思います。

○久元市長

心身と。要するに体力だけに焦点を当てるのではなくて、メンタルな部分の健康ということと、体力というのが結びついていて、心理的な安定と言っていいかどうか分かりませんが、気持ちの持ちようというのは、やはり他者との関わりの中で、それが生まれてくる。そのような観点から言うと、車で移動して車でまた帰ってくるというところには、心身の健康から見たときに、課題がある。そういう理解でよろしいですか。

○正司委員

あまりストレートに言うことはできませんが、可能性は少なくともあるかと思えます。人との出会いの可能性が減りますので、それがマイナスの影響になる可能性はあるのではないのでしょうか。

○久元市長

そうすると、やはり体力というのは、心理的要因と関係があって、人との交わりが、そこに影響する。そこまでは大丈夫ですか。

○正司委員

はい、そのように思います。

○久元市長

ちょっと視点が少し偏りすぎたかもしれませんが。今、まずこの体力、子供も含めた多世代の体力が落ちているということは、間違いないということなので、その要因を考えた上で、子供たちの体力づくりを考えようということなのですからけれども。この点についていかがでしょうか。我々はどのような視点を持つべきでしょうか。

○今井委員

皆さんがおっしゃったことの続きというか、重なるかもしれないのですが、先ほど、二極化という言葉が出ました。後ろの議論にも関わるかもしれませんが、本当に好きで、楽しくて運動していて、気がついたら沢山運動をしていて、より運動が楽しくなっているという、いいループに入っている層と、子供も大人も含めて、何かのきっかけで運動から遠ざかっていって、家でも楽しいスマホでゲームをすることに時間を使ってしまい、ますます運動から遠ざかり、苦手だから楽しくないしという本当に負のループに入ってしまう層。そのような二極化というのが、やはり実際にあるのかなと。

ただ、そうは言っても、自分にとって運動をして体力をつけていくことは、すごく大事ということをしっかり意識ができると、じゃあやはりちょっとこういうふうにやってみようとか、ちょっとこういう目標を立ててやってみようというように意識を変えていくことは、十分可能だと思うし、実際そうやって運動に復帰したり、少しずつ親しんでいっている子供も大人もたくさんいると思いますので、そういうきっかけや空間や時間という意識づけを、全市をあげてやってみようということは、すごく大事なのかなと思います。

例えば、大人でいうと最近企業や市等でも、健康経営の観点から、社員の健康のためにも運動をもっとしていきましょうという呼びかけがあるかと思うのですが、そういう中で、例えば、じゃあおうちのお子さんと一緒にこんなことやってみませんか、あるいは地域の子供さんも巻き込んでみんなでやりませんかというふうに、いろんな広がりを持っていろんなところが取り組めば、負のループに入っていた子供も大人も運動、体力づくりというところにまた進んでいけるのではないかと感じています。

○吉井委員

企業の健康経営という話も出ましたが、当社も健康経営を推進させていただいていますが、元々企業の場合は、成人病や精神疾患で会社を休まれる方が常時2%から3%ぐらいと多いということがあって、それは生産性を阻害しているということで、企業として生産性を上げるためにも、そういったことを取り込まなきゃいけないとい

うことで推進しているところでございます。

ただ、先ほど市長からもお話がありましたけれども、我々が若い頃、子供の頃は、学校が終わったら、家に帰ってすぐ外に出て、外遊びで遊ぶところがたくさんあって、そういう子供同士のコミュニティがあって、それが普通だったと思います。今はそのような環境があまりないということで、それは企業においても同じです。企業においても、皆さんに体力をつけるために、休みの日はどこかへ行ってくださいねと呼びかけても、場所もなければ、お金をそこに使う必要もあるため、強制できるものではなく、やはり会社がある程度サポートをしていかなければならないのだろうということで、お金を多少はかけながら、歩くことあるいはヨガを会社の中で時間を取って取り組んでもらうなど、いろいろ工夫をしながら、その体力向上のための施策をやっています。それなりに、多少お金なり時間なりというものがかかるのですけれども、必要なこととして、我々としてはやっています。

振り返って、子供に関しては、今お話がありましたように、安心・安全な場所がなかなかつくれないということもあるので、安心・安全に遊べる場所をどういうふうに提供してあげるかということが、我々が考えていかなければならないところなのかなというふうに考えているところです。それを後押しできるような施策が何か考えられればいいなと思います。

○久元市長

ありがとうございました。企業の中では、もう昔のように健康ということについて、自分で取り組むことができないので、企業として健康経営ということ、やはり経営という面から、取り組まなければいけないということですね。

○吉井委員

2015～2016年頃でしょうか、経済産業省と厚生労働省が一緒になって、健康経営を推進しましょうということ、企業にも一定インセンティブを与えてやっていきました。裏返すと、そのような後押しをしないと、なかなかお金をかけてやろうというこ

とにはならなかったのかなというふうに思います。

○久元市長

それを地域に、今度は置き換えると、昔は誰かが何をしてくれるわけではなくて、自然に子供が外で遊んでいた。しかし、そういう行動が見られなくなったということであれば、これは意識的に行政が、あるいは地域社会が、行政が全て担うということではないかもしれないけれども、自然発生的にできてないものを、言葉が適切ではないかもしれないけれども、人為的にあるいは政策として取り組まなければいけないというふうに考えるしかないのかもしれないかもしれません。その辺はいかがでしょうか。

○吉井委員

今日の御説明の中にもありましたけれど、学校の放課後の開放がございまして、前回お話があったときは15校ということでしたが、現在は36校まで広がってきています。当時市長は更に拡張して、全校に広げていったらいいのではというお話をされてきました。私はそういったことは非常に大事なことだと思っており、そういうサポートをぜひ進めていかれるべきかなというふうに思います。

○久元市長

先ほど、山下委員が非常に興味深いお話があったのは、農村地域のほうが周りに危険が多いから外に出ないと、むしろ市街地のほうが安全に遊べるところがあるから子供たちが遊ぶということ。これは非常に興味深い視点で、そうするとせっかく周りに自然があつて遊ぶところもいっぱいあるけれども、周りの地域の環境に対する意識というのは、恐らく大きく変わった。これはどうすることもできないというふうに考えるのか、もう少し意識的に変える必要があるのかということですよ。

教育大綱の中には、書いているわけです。教育大綱の中でどのようなことを書いているのかというと、人間は五感を統合して働かせることで世界を認識し行動している。現実の世界の中で様々な危機を知ることにより危険を察知し、回避、ときには危険と向き合う能力を習得する。子供たちがこういう能力を習得しながら成長していくこと



ができるようにするためには、社会全体の取組が必要で、ゲームやネットといった仮想現実への耽溺を避け、自然に触れ自然の中で伸び伸びと体を動かすことなど、子供たちに生きた現実の中で五感を働かせる機会をできる限り提供するという視点が大切だと。そこで子供たちが遊びやスポーツを通じて経験を経験することができるような取組を一体的総合的に推進すると書いてあるわけです。

これは8年前に総合教育大綱をつくって、その後やはりこのような視点というのは難しくなったということでしょうか。絵空事であったのなら、教育大綱を改定する必要がありますよね。どう思われますか。

○山下委員

絵空事とは、なかなか思いたくないような大事な理想も入っているかなという気がします。また、少し新しい観点として、防犯カメラのことも書かれてありますので、テクノロジーの利用というのは一定想定されているのかなという気がします。

例えば防犯カメラですと、管理社会みたいな言葉も浮かんでできますが、現代に生きている人は管理されたいとまではいかなくとも、管理されたいという気持ちもあるかもしれませんし、管理されても多少大丈夫というような気持ちも、今芽生えてきている気がします。

ですから、まずここに書いたことが絵空事かと言われると、そうは思いたくないのですけれども、若干理想としては飛躍していたところはあるかもしれません。でも改めて、前半に書かれてあることは非常に大事な事かなという気がします。

ただこれを本当に実現しようとする、市民や保護者でバージョンアップしていく必要もあるかなという気はしました。

先ほどのお話以来出てきている視点として、まず体力だけ取り出すのではなくて、それが心の問題とか、広く言うとウェルビーイングの問題と非常に深く関わっているというのは、本当にそのとおりだと思いました。例えば運動が得意な子は、得意なことをやって快活になり、心身ともに開かれていくような気持ちを持つ一方で、苦手な

子は逆にどんどん閉ざされていくような気持ちになっている。それがまた運動しない理由にもなっていく原因にもなることから、心と体の問題というのは、本当に深く結びついているなと思いましたので、ここの難しい結びつきを見失わないような取組というのが、大事になってくるかなという気はします。

特に私が焦点を当てたいのは、得意な子にはちゃんと機会を与えつつ、例えば放課後の場所を補償するだけではちょっと苦手が出てこないような、体力的にも健康的にも、ちょっと心配な子供たちがいるとすれば、そこに対して何とか手を差し伸べていくというようなことも必要かなと思っています。そのときに、例えば親御さんが、人と負けないように、というような形でプレッシャーを与えていたり、あるいは自分自身が負けたら駄目なのだと思い込んでいると、運動が得意な子は勝てるので取り組みますが、不得意な子は負けるのもうやらないという形になっていってしまい、心の奥底にある勝ち負けだけで物事を考えてしまったり、他の人と比較して自分のことを位置づけてしまうようなことが少し強すぎると、体力向上になかなか結びつかない。

そもそも体を動かしたりする、あるいはほかの人との関わり自体が、ちょっとつくれない形になってくると思うので、その辺りにまで踏み込んで、保護者や市民の子育てに関する知識とスキルのバージョンアップということは、必要かなと思います。そこに寛容な気持ちと、テクノロジーと組み合わせながらやっていけるところあるかなと思いました。

寛容な気持ちというのは、子供たちを外遊びさせていると、やはり親としては、けがをしないだろうとか、けんかになってトラブルにならないだろうかということをととても過剰に心配してしまって、ちょっと遊ばせるにも抵抗が出てしまうというところがあるのかなという気もするので、その辺りをどういうふう乗り越えていくか、あるいはそれをサポートしていけるかということは、ちょっと考えないといけないところかなと思いました。

あと、他の視点としては、個別に子供たち1人1人を捉えて体力を向上させていくの

か、あるいは集団化でしかできないのかをきっちり見定めていく、これは学校教育の使命ということにも関わっていくかなと思いました。

○久元市長

個別化ということと、集団化ということの視点を提供していただきましたので、今日はそういうことも含めて、今議論いただいた論点も踏まえながら、事務局から説明があった内容について、議論を進めたいと思います。

体力の向上に向けた取組としては、3つの視点に基づいて、様々な取組が行われていますが、この現在の取組については、どういうふうにお考えでしょうか。どういうふうに感じておられるでしょうか。

○今井委員

そうですね。先ほど説明があった、事務局で取り組んでいただいている3つの視点について、内容としては、これまでやってきたことをさらによりよくしていくという方向で、私はいいと思っています。

先ほども御説明の中でありましたけれど、やはり個別にその子の状態に合わせて目標を立てて、それを一つ一つ達成していくというようなこと。先ほどの山下委員の話もありましたけれども、人と競うのではなくじけてしまう子供さんもいると思うので、やはり自分でできることを見定めて目標を立てて、それをコツコツと達成していくことで、自己肯定感とか様々な良い面が育てられていくと思いますので、そういう授業の進め方はすごくいいと思っています。

先ほどの動画でもありましたけれど、自分の動きは自分では見えないので、先生やコーチとかに直してと言われても、なかなか分からなかった部分が、こういうふうに動画で見て、またそれをみんなで見合っって、意見を出し合ったりして、よくしていける授業ってすごく素晴らしいなというふうに思いました。

○本田委員

体力向上イコール体力テストが上がるというわけでもなく、先ほど山下委員も仰っ

ていましたけれども、運動量が増えることによって、もちろんメンタルヘルスというところにも関わりますし、運動の機会を拡充していくというところを、授業だけでなく、休憩時間とか放課後等、様々なところで取り組んでいるところは、楽しく運動量を増やしていくことができるという観点で、すごく大事かなというふうに思っています。

#### ○正司委員

例えば、学習にパソコンを使ったり、画像を撮りながら反省するという事は、我々の頃は絶対にできなかったし、いいなと思っています。ラケットがどこを向いているのか、ちゃんと振っているはずが振れていないことが分かるということは、プラスの面があると思います。また、例えば体育祭も、自分たちが楽しむためにやろうということを先生のガイドも受けながら取り組んでいるということで、見に来た人のための体育祭というものに比べると、そういう意味でプラスになっているし、様々な体力の向上の工夫に、遊びの精神を入れているというのもいいなと思っています。

ただ、やはり子供の数が減ってくると、できる子とできない子がはっきりして、ゲームをしてもいつも勝ち組と負け組ができてしまい、ゲームがなかなか続かない。運が左右して続けられるゲームでないと、楽しく遊べないという状況になっている辺りが今の難しさかなと思っています。

大谷選手からグラブを寄付していただきましたが、キャッチボールができない子供たちが多くて、せっかくあるグラブがなかなかうまく使えていないということを、学校訪問のときに聞かされました。山下委員から先ほどのような説明を受けて、やはり時代が違うので基礎のところは教えるなどする必要があるかもしれません。

#### ○久元市長

今、非常に取組を詳細に説明していただきました。もちろんこれは教育の内容に関わるので、教育委員会が責任を持ってやっていただければいいのですが、総合教育会議なのでせっかくの機会、つまり大所高所から議論していく場だと思うので、こういう取組が、先ほど山下委員からおっしゃった、子供たちの体力が二極化をしていると

ということ、それから体力とその心と体がつながっていることと、深く関連しているというような観点。

また、山下委員からはその個別の子供の対応、つまり個別化ということと、集団で対応するということ等の必要性ということをおっしゃいましたけれど、そういうような観点から、この取組ということが、そういう方向から見て評価できるものなのか。

この方向でやっていくと間違いなく、子供たちの体力が向上するとまでは言えないにしても、よい方向に向かって進んでいっているというふうに考えられるかというような視点から少しお話をさせていただければいいと思います。教育長も含めて御論議をいただければと思います。

○福本教育長

教育委員会で取り組んでいる3つの取組については、全体的な体力ということ言えば、入り口だと思っています。運動が苦手な子も好きな子も全ての子供たちにおいて、今は多様性を重視しますので、運動機会の拡充以外は、やはり入り口の段階。週に45分なり50分、体育の授業は3回とか4回しかありませんので、そこで様々なモチベーション上げていくような、そこが教育の現場では限界だと感じます。

ただ、先ほど紹介がありました、3つ目の運動機会の拡充について、保護者が子供たちを外で遊ばせない、危険で遊ばせられないということであれば、昔のようにほっといたらいいですよとは言えない時代ですので、学校を核にした地域の在り方を考えていこうというところが、今どんどん出てきています。それはおそらく今の保護者が思う危険といったような、そういう価値観に対応したやり方だと思います。

大分放課後の開放も進んでいますけれど、ここはもう学校の設備・施設をフルに活用して、子供たちが運動に親しめるのであれば、そこを考えていかなければいけない時代に入っているのではないかなと、私はそのように思います。

○吉井委員

私は大変よく練れた施策になっているなというふうに、個人的な評価をさせていた

できます。というのは、このデータを見てみますと、運動の好きな子供、これは前回の話もありましたけれど、全体の55%ぐらいの子がスポーツジム、そのようなところに通っているという話があって、好きな子供はそのままやっておいてもらったらいということなのですが、好きだけれども行けていないという子が何割かがいるのですね。これはどういう事情なのか、分かりませんが、家庭の事情があるのか、どのような事情があるか分かりません。そういった、好きだけれどもできていない子、好きだけれども習いにいくような、そういう気持ちもあまりありませんというような子、それとあとは苦手とか、あるいは嫌いな子、こういうふうに分類されるのだなど。その分類されたそれぞれの子供に対する施策としては、非常によくできていると思います。

特に問題になるのは、2番目、3番目、4番目、好きだけれども家庭の事情で行けない子、これはおそらく公的な何らかの補助がいるのだろうと思いますし、好きだけれどもどこにも通うところまでいかないという子は、外遊びができる場所などの提供云々が考えられます。

最後にスティーラーズとの連携がありまして、神戸は市長もよく仰っていますが、サッカーのプロチームもある、それからバスケットのプロチームもある。それから、このスティーラーズもあれば、野球はちょっと遠いですがけれどある。神戸カーニバルみたいな陸上みたいなものもやっていて、スポーツに関して言うと、接する機会とか、見てその楽しさを理解する機会が、非常に多い地域だと思います。

そういう意味では、そこと市がうまく連携をして、きっかけを与えてあげるといいですか、好きになるきっかけを与えてあげるといふ施策は、非常にいいのではないかなと思って、もっともっとスティーラーズだけではなくて、ほかにも展開を広げていくのがいいのではないかなというふうには思います。

○久元市長

その点について言うと、INAC神戸の皆さんも、非常に子供たちに女子サッカー

の魅力を伝えたいということを抑って、ぜひさらに活躍して、対応してもらえればな  
というふうに思っております。

ほかはいかがでしょう。

○正司委員

場所としての学校をもっと有効活用するというのが、3番の取組の視点の延長上、  
非常に重要な話だと、私も思っています。

そこで、それを動かすのに教員がさらに仕事が増えるとなってしまうと、ただでさ  
え働き方改革の議論がある中で、課題になるのではないかなと思うので、そこをどの  
ようにしていくのか、工夫がいるだろうと思います。

中学校の部活という活動も、体力にかなりプラスの効果があると思うのです。本来、  
部活が学校の中なのか外なのか、ちょっと微妙なところがあると考えますけれども、  
この部活についても、今地域移行という話が出ています。これが子供たちにマイナス  
の影響を与えない形で、一方で先生のボランティアの行き過ぎみたいな形にならない  
形で、その活動水準をどう維持するか、楽しく体を動かすというレベルでの部活動を  
維持していくのかということを考えていくことが、重要かなというふうに感じていま  
す。

○久元市長　この説明があった放課後の運動遊び事業、大学生とか外部人材に入っ  
てもらっていると、それから民間事業者に入ってもらっていると。これはやはり教員  
の負担を減らすというような観点もあるのですか、先生方の。そうですね。

そういう観点から言うと、この大学生の外部人材の運動遊びサポーターというのは、  
非常に効果が上がっていて、今は、小学校は令和4年度15校から、令和5年度は36校  
に増えて、令和6年度の数字は分かりませんが、拡充していくほうが良いというふう  
に考えておられるのでしょうか、まず事務局のお考えを。

○教育委員会事務局学校教育課部長（教科指導担当）

それがもし可能であれば、ぜひ拡充をしていく方向でお願いできたらと思っております。

ます。

○久元市長

民間事業者のほうは、どうですか。

○教育委員会事務局学校教育部部長（教科指導担当）

民間事業者のほうも、登録者がもっともって増えていただいで、現場からの声もぜひ伺いたいということとマッチングさせていければ、もっともって放課後の時間を有効に使えるのではないかなと思っております。

○久元市長

正司委員からは、こういう子供たちにそういう指導するという事になったら、教員の負担が増えるのではないかということがありましたけれど。教育長、何かその辺で。

○福本教育長

いまさっき、3部制の話をちょっと出しましたが、教員の負担を減らすためにすること、これは体力向上だけではなくて、学校運営全般の話になってきています。そして、今は次の大きな課題である、部活動の地域移行。こういうふうなものは、もう絶対に今の状態からは、体力向上だけでいうとマイナスなことの方向へいくのですけれど、その方向に向かうのをできるだけ避けて、学校運営全体を変えていく、これはおそらく学力向上も含めてなんですけれど、そういう大きな流れの中でやっていくべきだと考えております。

○久元市長

分かりました。ほかいかがですか。紹介があった取組を、これをどんどん進めれば、子供たちの体力も心身も、非常によくなるというふうに、手放しでこれをやってみたらいいということでもよろしいですか。どうぞ。

○本田委員

委員会の話も出てきたのですけれども、運動することがどれぐらい自分たちの体にとっていいことなのかというような教育部分も、やはり学校としてはやっていくこと



は重要かなと思います。それを保護者の皆様にも分かっていただくっていうところのアプローチは、もう少し必要ではないかなというふうには考えています。

○久元市長

なるほど。どうぞ。

○山下委員

先生方の御負担を増やさないというのも、そのとおりでなと思いました。例えば、子供たちが体を動かすって楽しいだとか、我々がちょっと期待するような爽快感とか、単に経験するだけじゃなくて、それを自分の血や肉にしていくところはあるのかなと思うのですね。

あるいは、本当に自分を大切にしようと思ったら、ちょっと負荷をかけてみるのが大事だとか、我々が、大人が人生の中で気づいてきたようなことを、子供たちも多分気づいているので、例えばそういったところは学校側もちょっとうまくリンクしながら、体育の時間のときとかに、そういったことを子供からフィードバックをもらいながら、気づきを言語化するようなどころについては、学校側がむしろできるところとか、やるべきところというのはあるのかなということは、今一つ思いました。

もう一つ、手放しでいけるのかという話になると、多分体力は上がってくると思います。当然ここの中でトラブルとか、そういったものも起こってくると思うのです。それをどういうふうにするのかということも、ちょっと体力とはまた離れるかもしれないのですが、実は私は結構深く結びついているかなと思います。その辺りについてどう考えるか。

これは例えば来ている大学生や大人に全部任せっきりにするのか、それともトラブルを子供たちが解決していく、それをサポートしていく形になるのかというようなことは、もうちょっとこれから詰めて考えたり、あるいは観察していく必要があるかと思えます。

その中で、保護者の皆さんも、寛容の気持ちを持って、温かく見守っていただくと

というようなことも必要になってくるかなという気もしております。

○久元市長

例えば、この大学生などが指導しているときの、心配しだしたらきりがないのかもしれないかもしれませんが、トラブルみたいなことが実際に起きているのか起きてないのかとか、その辺の対応とか、もし事務局の考えがありましたらお願いします。

○教育委員会事務局学校教育部部長（教科指導担当）

大学生が前に立ってという活動は、回数にしてはそのように多くはありませんので、特に大きなトラブルというのは、特には今のところは聞いておりません。ただ、今後、また回数が増えていけば、そういう対応も見越して考えていかなければならないということは、思うところであります。

○久元市長

分かりました。どうぞ。

○本田委員

この事業を拡大していくといったときに関わるのですけれど、大学生の話が出ていましたけれども、私も大学で勤めておりまして、このようなボランティア活動だったりをする学生がものすごく不足しています。

○久元市長

不足している。

○本田委員

はい。大学生のもちろん数が減っているということもありますけれども、やはり様々な学校で、こういった活動のことであったり、学生はどうですかというお声もたくさんいただくのですけれど、その学生が集まらないという現状があつて。

それがどんどん増えていったときに、これをサステナブルにやっていこうと思うと、そこの人材確保というのは、これからすごく課題になるのではないかと思います。

○久元市長

これ例えば、集まらないというのは、もうちょっと処遇を改善したら解決するのか、あるいはそもそも処遇の問題ではなくて、学生がそもそも忙しいからなのか、いろんな要因があると思います。

例えば、学生の皆さんに参加してほしいと、大学生の皆さんなんかと意見交換したときに、いろんなボランティアをしたいけれども、どういうところに相談したらいいのか分からないと、どういうところが学生を募集しているのか分からないので、もっときちんとマッチングするシステムをつくってほしいという声も、一方であるのですが。その辺、御自身の御経験に対していかがでしょうか。

○本田委員

そうですね。私のところの大学に関しますと、教員に対してとか、いろいろなボランティアの掲示板があってというところで、やっているのですけれども、確かに、そういうふうに豊富に情報が得られる大学もあれば、そうじゃないところもあるかもしれませんので、マッチングというのは大事かなと思います。

一方で、学生が忙しすぎるのかといたら、そうでもないような気はしております。例えばアルバイト等で、お金を必要な学生ももちろんいますので、処遇というところも、もちろん必要になってくるのではないかと、単にアルバイトというだけでは、なかなか難しいところは今後あるのではないかなというふうには思っています。

○久元市長

社会的に有用で、そしてそういう経験が学生にとっても非常に価値があって、処遇もいいということならば、学生の皆さんにとってハッピーですね。そこはちょっと考えていく余地はあるかもしれませんね。

あとはもう学校の中の話は、もう教育委員会の中で考えていただければいいのですが、子供たちの体力あるいは心身の健康ということを考えたときに、子供たちが過ごす学校の外、家庭の中、あるいはまちの中、地域社会の中、あるいは登下校の途中とか、いろいろ過ごす時間と空間があるわけですけど。そういう面で、体力あるいは

心身の健康ということを考えたときに、学校以外の場所でこういうような課題があって、こういうことを思って考えたほうが良いというようなことはあるでしょうか。

これは教育長も含めて、御意見を仰っていただけたらいいと思いますけれども。

○本田委員

まず初めに、体力向上、健康ということを考えると、例えば、睡眠と日常の活動量というのはものすごく相関があるというふうに言われていますので、良質な睡眠が取れていないと、そもそも運動したくても、それができないという状況や、食事ということがあるので、そういったところはやはり学校外のところになってくるのではないかと思います。

○久元市長

この辺は先生方も指導されているのでしょうか、学校ではもちろんね。指導されているのだと思うのですけれど。それは家庭の問題で、家庭へのアプローチというのは、どれだけできるかは、はなかなか難しい問題ですけれどね、大事な視点ですね。

ほかはいかがでしょう。どうぞ。

○福本教育長

やはり学校外のところの子供たちの多様性、地域住民の多様性も進んでいます。なので、よく言われるボール遊びをしてはいけないとか、子供たちのありようについて非常に厳しい目があったり、寛容な面があったりで、社会全体がバラバラになってきています。学校は今、働き方改革で、どちらかというところ、保護者のほうに全てを返していかななくてはならない状況に今はなっています。

ただ、やはり見ていまして、到底返せない家庭も山ほどありますので、そこを今、やはり命に関わることでありますとか、先ほど体力とは言いながら、やはり心身のことです。そういうことについて、やはり一定福祉機関とも連携しながら、学校の果たす役割は大きいのではないかなと、今思っているところが強いと思います。

○久元市長

分かりました。あと、公園については、これはかなり市長部局の中でも議論をしておりまして、広報紙K O B Eでも、特集を組んだことがあります。ボール遊びは禁止みたいな公園はできるだけ減らしていこうということで、取組はかなり進んでいるという、まだまだ十分でないところありますし、公園ごとにやはり地域の公園を利用する人の意見っていうのが、やはりそれぞれ違うところがありますので、上手にコンセンサスを、建設事務所や公園部が入って、そこはコンセンサスを取りながら。

ただ大きな方向としては、今公園の掲示板で、掲示板自身の表示を変えようとしているのは、やってはいけませんではなくて、できますことを書く。

嫌になりますよね、これはやってはいけません、それは必要なことなのですけど、ゴミを捨ててはいけません。犬の散歩をしてはいけません、ボール遊びはいけません、ゴルフの素振りはいけません、べからず集みたい、見る人も嫌になってしまいますから。

そうではなくて、もっとポジティブにこういうことができることを書いていこうということで、今やっているのと。それからボール遊びはできるだけ認めていくということ。それから、先ほど吉井委員からバスケットのお話がありましたけれど、バスケットのゴールをできるだけ早く倍増させるということで、今進めてはおります。まだまだ十分ではないところがありますけれども。

ほかはいかがですか。どうぞ。

○辻企画調整局長

その関係で、資料に添付させていただいているのですが、データ上の分析で公園の数以外にも、運動時間の関係と分析させていただいています。簡単に御紹介をさせていただきます。よろしいでしょうか。

○久元市長

どうぞ、してください。

○正木企画調整局局長（DX担当）

ちょっと簡単にだけ、概要だけ御説明させていただきます。

先ほどの御紹介あったデータを基に、いろいろ分析をおこなったのですが、ちょっと概要だけ御説明いたしますと、その体力合計点に、どういう項目に影響があったかというところでは、「運動の好き嫌い」、そしてまた「授業以外の運動時間」というのが、最も体力を受けての寄与度が高かったというところで、その運動の好き嫌いという主観的な要因と、授業以外の運動時間という客観的な要因、運動機会のようなものの両方が重要だったということが確認できたということでございます。

それもある程度当たり前なのですけれども、この枠線にありますとおり、この授業以外の運動時間が何によって決まっているかというところで分析したところ、男子については、その校区内の公園の数が多いほど、授業以外の運動時間が長かったというところでは、ここにありますが、校区内に公園が「ほとんどない」、「多少はある」、「多数ある」というところでは、男子で言うとかかなり、運動時間が変わってくるというところでは、ですので、ここは放課後の運動場開放みたいな運動機会を与えてやると、こういう公園がほとんどないところでも、運動するかもしれないと。

一方、女子はですね、そういったところであまり関係なくて、運動機会を提供する以外の施策は、もしかすると必要になる可能性もあると思います。

あと、合わせてなんですけれども、ほかのデータ、学校ごとにどういう違いがあるかっていうところでは、こういう保健体育の授業において、こういった目標を意識した学習で、できたり分かったりすることがあるか、友達の助け合いでできたり分かったりすることがあるか、授業内容の振り返りでできたり分かったりすることがあるか、ICTを活用することができたり分かったりすることがあるかというところが、結構学校ごとに傾向が違っていましたので、進んでいるところの学校の取組を参考に、ほかの学校をやっていくという方法もあるかなというふうに考えていたというところでございます。

○久元市長

興味深い、考察、データですよ。今の説明は、教育委員会と情報共有できているのですか、学校ごとのデータと。

○正木企画調整局局長（DX担当）

はい。

○久元市長

分かりました。今の説明に対して、何か感想とかありますでしょうか。

男子生徒と女子生徒とそのように違いがあるものですかね。データが示しているでしょうから、そうなのでしょう。

いかがですか、よろしいですか。どうぞ

○山下委員

今市長おっしゃったとおり、非常に興味深いデータで、もっと詳しく、少し考察してみたいなと思っております。

個人的には事例検討も少しさせていただけたら、非常にありがたいなと思ってます。

男子児童・生徒と女子児童・生徒の違いは、その各年をちょっと見てみないと何とも言えないのですが、やはり女子のほうが、少し習い事が多いので、それも影響しているのか、室内遊びがやはり主流なのかということとかですね、少し個別に聴き取りなんかもすると、ちょっと見えてくるかなと思われました。

もう一つ興味深かったのが、授業の在り方が、学校ごとの違いで大きく影響を及ぼしているという分析結果が出ていて、これもICTがどう影響を及ぼしているのだろうかというのも、ちょっと踏み込んで検討してみる必要があるかなと思いました。

おそらくここで出ているのは、一応分散分析なり、重回帰なりだと思うんですけども、結局のところは別の変数によって、両者が左右されたりしていることもあるかもしれないので、例えば、体力のある運動のできる子が結構いるから、こういう目標を意識した学習をされているのか、あるいは地域柄なのか、それとも学校の伝統なの

か、あるいは御担当の先生の個性なりお考えなのかというところは、もうちょっと事例検討で検討していきたいなど、詳しく深掘りしていきたいなというふうに思っているところです。

○久元市長

ありがとうございました。どうぞ。

○正司委員

今、山下委員がおっしゃったとおり、このデータ分析の結果をいただいて、非常に興味深いなと思いました。

もちろん因果の方向性がどっちかというのは、こういう分析ではなかなか見えないので、そこは気をつけて結果を見ないといけないなと思うのですけれども。今おっしゃった、例えば公園の数とのリンク、少なくとも男の子には明らかな差が出ているので、大きいなと思いました。

一方で、分析の結果を読むときには、非常に注意しないといけないなと思っています。ICTのところも、代理変数が何なのか、本当にICTがダイレクトに働いているのか、例えば、生徒を丁寧に見る余裕が先生方にある学校と、ない学校とで違いがあるのかとか。

確かこの子供たちのアンケートには、生活習慣、画面を見ている時間とか、そういう項目もあったので、その辺りで差が出ているのか、出てないのか、その辺りも、また教えていただいて議論させていただきたいなと思っています。

○久元市長

ありがとうございました。本日は議論にならなかったのですが、ICTを活用すると、体育の向上に寄与するという面と、ICTと密接不可分のこのスマホを、前に議論をしたときに、スマホを全く使わない子供の成績よりも、1時間ぐらいスマホを使う子供の成績のほうがいいと。

ところが、そこから長ければ長くなるほど、学力が低下をするということが報告あ



りましたね。ですから、このスマホとの付き合い方ということ、やはり考えていかなければいけない。

体力にも当然当てはまる話、恐らく体力についても、スマホにかじりついていたら、体を動かす時間がその分減るわけですから。今日は全く議論でなかったのですけれども、これは引き続き、これも子供だけの問題ではなくて、大人ももうスマホ好きですよ。

これはもう行き渡っている話なので、この総合教育会議で改めて議論する必要はないのか、あるいはもうちょっとそこを議論したほうがいいのか。これはあの体力の問題だけではなく、もうちょっと幅広い観点から。あるいはスマホフォーラムみたいなこともやって、子供たち自身に考える取組をしたのですけれど、こういう取組を教育委員会と市長部局が共同して、もう大分長いことやってないです、実は。こういうことをやったほうがいいのかどうか、その辺をもし御意見がありましたら、教育長も含めてお願いしたいと思いますが、いかがですか。意味がないですかね、どう思われますか。

○本田委員

スマホを、使わないという選択肢は、もちろんないと思うのですけれども、子供たちはやはり成長発達の途上にありますので、どうやって使うとか、どうやって付き合っていくかということについて、子供のときから議論をしていくことは、やはり継続していく必要があるのではないかなと、私は思います。

○久元市長

ほかはいかがですか。

○今井委員

本田委員と同意見で、やはりもう本当にこれからずっと続いていく話だと思いますので、やはりもっと継続的に、今の状況、これまでの状況を確認しながら、お話を聞くということは大事かなと思っています。

○久元市長 教育長、何かございましたら。

○福本教育長

今、保護者がフィルタリングをかけられることは有名なのですが、時間も切れるような形で、きちっと制限されている方が案外増えています。なので、保護者も巻き込んで、子供たちもそうですけれど、続けていって、一定のことを大人がやってあげないといけないということは、間違いないと思います。

○久元市長

そうすると、何らかの議論する場というのを、意見交換をする場というのを、フォーラムのような形がいいのか、子供たちも保護者も参加をしてするような場というのを、これを市長部局と教育委員会のほうで検討していただくということで、副市長いかがですか。

○小原副市長

以前、企画調整局のほうを中心にフォーラムを実施したかと思います。やはりこども家庭局も主体になってくることになると思いますので、あわせて教育委員会とも連携を取りたいと思います。

○久元市長

そうですね。そうしたらこども家庭局と教育委員会で連携して、スマホについての向き合い方を議論する場をつくりましょうということ、また検討していただければと思います。

○正木企画調整局局長（DX担当）

御参考までですが、この調査、データでは画面視聴時間というのもありまして、スマホとかテレビ、タブレットも含めていたと思うのですが、強い関係ではないものの、体力合計点と一応負の相関があるということで、画面視聴時間が長ければ長いほど、体力合計点が低くなるという傾向は、このデータでも観察されています。因果関係なのか相関関係なのかとかということはもちろんあるのですが、一応データ

ではそういうのを確認されております、御参考までに。

○久元市長 なるほど。分かりました。そうしたら、体力に関する議論は、大体これぐらいでよろしいでしょうか。

それでは、あとは総合教育会議もそのように頻繁には開けないのですけれども、できるだけ開催をしたいと思っておりますけれども、次はどのようなテーマを議論したらいいでしょうかね。

私の希望としては、やはり教育の現場の問題は、教育委員会で考えてもらうわけですが、やはり教育現場を支えるのは人材、つまり小中学校の先生方をきちんと採用して、そして大事なことは誇りを持ってしっかり子供たちと向き合ってもらい、そういう環境をどうつくっていったらいいのかという採用の問題と、それから育成の問題ということだろうと思うのですけれども。

そういう人材の確保・育成、そして気持ちよく誇りを持って仕事をしていただくための環境ですよね、学校環境。これはこの教育大綱でも、資質の向上あるいは学校の組織力の強化ということでも取り上げているテーマで、これまでも多忙化っていう観点からもっぱら議論したのですけれども、もうちょっと視野を広げてですね、人材の確保・育成と、そして先生方の働く環境というようなことを、これは教育委員会だけで解決できない部分もあると思いますから、そういう点を議論していただいたらどうかと思いますけれども、もし御意見がありましたら、どうぞ。

教育長、何か御意見はありますか。

○福本教育長

ぜひ、やっていただきたいと思っております。

○久元市長

そうしましたら、次回はまた事務局で案をつくって、事前に御相談をして、私としてはそのように遠くない時期に、これ非常に重要なテーマですから、もう一種のもう我が国の内政の中でも極めて重要な問題だというふうに思いますから、できるだけ

近い時期に、この点も基本的な視点を交えて、しっかり議論をしたいというふうに思っています。まずこれがありますけれど。

それ以外には、総合教育会議で取り上げた方がいいテーマとかという御意見がありましたら、いかがでしょうか。よろしいですか。どうぞ。

○福本教育長

当然、教育委員会内で考えて案を出していきますけれども、やはり社会的には一番大きな影響がある、喫緊の話題というのが部活動の地域移行になってくると思っていますので、教育委員会で考えながらも、やはりいろんな部局を巻き込まないといけない問題ですので、議題にさせていただいて、皆さんで考えることがあれば、並行してやっていきたいと思っています。

○久元市長

分かりました。部活動は教育委員会のほうでお考えいただければなと思っていたのですが、総合教育会議でも議論したほうがいいのかということですか。

○福本教育長

おそらく学校でできる範囲と、他部局も交わってやっていかないと解決できないこと、あるいは、解決できる道筋になるかどうか分からないようなぐらいの大きなテーマですので、またよろしく願いいたします。

○久元市長 分かりました。この総合教育会議で議論するのがいいのか、教育委員会と市長部局の関係する部局の間で、別の議論の場を持つのがいいのか、それはまた別途相談させていただきます。

○福本教育長

はい。

○久元市長

それでは、今日は大体議論が尽きたと思います。マイクを事務局にお返しします。

○企画調整局大学・教育連携推進課

ありがとうございました。 本日は活発な発言ありがとうございます。本日予定しておりました議題は、以上になります。

これもちまして、令和6年度第1回神戸市総合教育会議を終了させていただきます。忙しい中ありがとうございました。